

令和5年度 第1回白馬高等学校学校運営協議会 議事録（概要）

- 1 日時 令和5年（2023年）4月24日（月）13時30分～15時30分
2 場所 白馬村役場 201・202会議室
3 出席者 委員12名（欠席 武田委員、富原委員）

他に、宮澤直哉（高校教育課高校再編室室長）
中島秀明（高校教育課主幹指導主事）
有坂清明（高校教育課主任指導主事）
白馬村副村長、小谷村副村長
小谷村教育課長
白馬高校支援係局長補佐、同主査
白馬高校魅力化コーディネーター
白馬高等学校教頭、事務長



4 次第

(1) 開会の言葉（藤森要白馬高校教頭）

(2) 長野県教育委員会挨拶（宮澤直哉高校教育課高校再編推進室長）

- 平成28年に設置された協議会は8年目を迎えている。昨年7月に規則を改正し、定員を10人以内から15人以内とし、昨年8月からは14人の委員で運営されている。前年度末からは2つのワーキンググループに分かれた活発な討議がなされている。また全国募集や中学校説明会などでも委員の方々が参加され、直接白馬高校の魅力の説明をいただいていることに、感謝と敬意を表す。長く厳しいコロナ禍が続いていたが、資料表紙の写真のように大勢の新入生を迎えることができたことは、着実に地域と連携しながら取り組んでおられる成果である。
- 白馬高校は地域連携のパイオニア的存在であり、今後の学校改革を進めていく上で参考にするべき点がたくさんある。今年度54名の新入生を迎え、中でも国際観光科は4年ぶりに30名を超え、県外からも10名が入学し、以前私がこちらの担当をしていた頃に戻るくらいの数となった。新入生全員が3年後、白馬高校で学べてよかったと思って卒業していつてくれることを願い、その思いをみなさんと共有するとともに、そのような学校を共に創っていきたいというのが教育委員会の決意である。この学校運営協議会は県立学校の中で唯一のものであり、今後の発展のためにも活発な議論をしていただきたい。

(3) 学校長挨拶（関正浩白馬高等学校長）

- 日頃より本校の学校運営に大変深いご理解とご協力をいただき感謝申し上げます。昨年度の協議会で2つのワーキンググループを設けていただき、何度も会議を重ねて本校の全国募集ならびに魅力化の方策についてご検討いただいたことに重ねて感謝申し上げます。検討の結果についてこのあとの審議の中でご提案いただき、全体で共有したい。
- 今年度はこれまで以上の危機感と緊張感を持つスタートとなった。もちろんこれは、県の再編整備計画にある高校再編基準が効力を持ったことによる。令和元年度から続く生徒数の減少は、途中コロナ禍という要因があったとはいえ、上向きに転ずることができないまま今日に至り、今年度の在籍生徒数は136人となった。2年連続で基準に抵触しないために、今年は特に、適宜適切な情報発信によって、より多くの皆さんに本校の魅力と本校の教育活動を支える充実した環境の魅力を伝えて、中学生や保護者から選んでいただける学校作りを進めていかなければならない。
- この学校運営協議会を核として、白馬・小谷両地域の皆様のご支援を得ながら、県・地域・学校の三者による協働体制によって、本校の存続に向けた取り組みを強力に進めていく。「できることはすべてやる」そんな姿勢で取り組んでいきたい。

(4) 委員の自己紹介（略）

会長・副会長選任

- 互選により、白戸委員を会長に、武田委員を副会長に選出。全員一致で承認。

(5) 審議事項

*学校より現状報告と学校経営方針・組織編成・教育課程の提案<関校長>

- (資料5ページ) 在籍生徒数と入学者の推移。
再編基準抵触を回避するには、来年度70人以上の入学者が必要となる。来春卒業予定の中学生は、長野県全体で390人、当地区でも27人減少する見込みであり、これまで以上に力を入れた募集活動が必要である。
- (資料7ページ) 新入生の部活動の参加状況。
54人のうち、8割弱にあたる42人が加入した。県外生10人は全員が加入し、うち6人が山岳部、2人はスキー部と、目的意識をもって入学してくれていることがわかりうれしい。生徒会でも部活動の活性化を課題としており、学校としてそれを支える取り組みを進める。
- (資料8~10ページ) 今年度の募集活動ならびに教育活動の予定。
- (資料11ページ) 進路状況。
卒業した48人中24人が首都圏・関西圏の4年制大学へ進学した。4年制大学の進学率が50%を超えたのは本校で初めてのこと。また、公営塾でお世話になった生徒が一般入試で合格を勝ち取ったことも喜ばしいことである。
- (資料13~19ページ) 学校経営方針・組織編成・教育課程。
 - ・今年度の重点目標として、生徒募集、学校教育活動の充実・魅力化の推進をあげた。目標達成に向けて、資料14ページにある体制を整える。生徒に対しては、スクールカウンセラーや特別支援学校教員、外部機関との連携をとり、一人一人にきめ細やかな支援を行い、生徒募集については、支援係と協働して首都圏・関西圏での説明会や本校での体験入学会・学校説明会、中学校を訪問しての中学生や保護者への情報伝達をしっかりと行いたい。
 - ・中学校との連携では、授業や課外活動における交流推進を柱の一つにあげ、将来的にはカリキュラムの面で中高の連携をはかり、子どもたちがこの地域で学びを継続する必然性を感じられるような仕組みと中身を整えていきたい。この点についてはのちほどワーキンググループからのご提案でも取り上げられることと思う。
 - ・資料15ページにあるコンソーシアムは本校の教育活動を支える重要な仕組みである。かつて、みらい協育サポーターとして村内外の方に協力いただいていたものを、令和元年度から実施した文部科学省「地域との協働における高校教育改革推進事業」の中で新たに組織化したもの。今後さらに地域のご協力を得ながら拡充していきたい。
 - ・もう一つの柱は国際交流である。5月末にシンガポールの高校生との交流があるほか、台湾との交流、白馬インターナショナルスクールとの交流も今後予定している。また、年度末にはニュージーランド研修を再開すべく準備を進めているところ。
 - ・組織編成には大きな変更はないが、クラブ同好会に「プロジェクト学習インターアクト部」が新しく追加になった。ロータリークラブの支援を受けて国際交流やボランティア活動に取り組む。そうした生徒の姿を地域の皆さんにぜひ見ていただきたいと思う。
 - ・新教育課程の2年目になる。特色ある学校設定科目を柱にししながら、通常教科の内容を充実させていく。外に出てしっかり活用できる力をつけた生徒を送り出せるよう取り組みたい。

<白戸会長>

- 令和5年度白馬高校経営方針、組織編成、教育課程について承認いただけるか。
異議なく、すべて承認。

*白馬山麓事務組合より支援授業の内容および予算について説明・提案<松澤局長>

- (資料20ページ) 寮の管理・食事の提供は業務委託。舎監は引き続き組合が任用する。
- (資料21ページ) 当初予算の内訳。公営塾で昨年からはじめた特進クラスでは、一般入試で合格する生徒もあり徐々に実績を上げている。寮生については、今年度より1年生にフィールド体験学習を取り入れ、仲間と協力する力を身につけるよう取り組む。
- (資料22ページ) 寮の運営方針として、相手の立場を尊重する規則正しい生活を送ることを通じて、自立心や協調性を育みながら人間的成長を促していく。管理面では、先生方が寮を頻りに訪問してくれて感謝している。コロナ禍で交流行事がほとんどできていなかったのも、バーベキューなどのイベントを再開したい。

<中村義明委員>

○小谷でフィールド体験学習をやったというが、その内容を教えてほしい。

<中村補佐>

○4月22、23日の1泊2日で、小谷村にあるアウトワード・バウンドの体験学習プログラムに、寮生15名が参加した。プログラムは、与えられた野外学習の課題をみんなで考えながらクリアしていくというもので、様々なアクティビティを行った。

<白戸会長>

○事務組合からの支援事業計画についてご承認をいただけるか。
異議なく、承認。

*各ワーキンググループからの報告と提案

全国募集ワーキンググループ

<太田委員>

- 来年度の募集にあたっては、最低でも70人を目標とした。中学3年生が学校を決める秋までが勝負。春先にしっかり活動しなければならない。生徒だけでなく保護者に理解していただくためにも、委員も出て行って説明をするのがいいだろうということになった。
- 白馬高校はスキー部という印象が強いが、ほかにもダンス部が、少人数ではあるが村内の立派な指導者に恵まれて良い成績を上げている。スキー部以外にもスポットを当てた広報が必要だ。プロモーションビデオでもダンス部を登場させて欲しい。
- スキーでは基礎スキーに取り組みたいという生徒もいるので、競技スキーだけでなく同好会などで、幅広く生徒も集められるようにしていきたい。
- 卒業生のオリンピックにスーパーバイザーにお願いしているので、白馬高校ではオリンピックとも交流ができるということをアピールしたい。
- 高い料金を払わなくてもレベルの高い公営塾があることを説明会でアピールしたい。
- 募集活動に関しては、PRビデオの中で生徒の動画を紹介したり、「白馬高校を育てる懇話会」にも協力を求めたりして情報発信に取り組むのが良いという意見が出ている。
- 生徒募集の活動には、ワーキンググループの所属に関わらず、出られるところには出てPR活動をしていただきたい。
- まずは夏までに声を上げていきたい。当面、可能な土日に集まる予定である。

<白戸会長>

○補足があればお願いしたい。

<中村義明委員>

○達成目標をまず70と決めたので、できるだけいろんな人に協力をお願いする。東京や大阪の説明会でも丸山村長や私が空いているときには直接行って話して熱意を見せたい。補足というよりは決意を述べた。

<丸山委員>

○2年連続で160人以下もしくは一つの学校から半分以上入らないと再編対象となるということだが、来年の5月時点で基準に該当したらすぐに4つの選択肢のうちのどれかになるということか。白馬高校の生徒減少の状況は、ちょうどコロナ禍で減った観光客数と同じ状況にあり、そういった状況が来年の5月時点で考慮されるのかどうかお聞きしたい。

<宮澤室長>

○白馬高校は、運営協議会を設け、国際観光科を設置し、全国募集を行うという前提の中でここ数年の学校経営がなされている。過去に望月高校が、第1期再編基準に該当した時には、2年連続そうなるのを確かめてから地域とご相談させてもらった。白馬高校が懸命な努力にもかかわらず、もちろん私どもも一緒に努力するが、その大前提の中で、残念ながら6年5月1日現在で160人以下になったからといって、7年4月1日からこうするという乱暴なことは申し上げることはない。後段については、ご意見として承るが、誰もが予想できなかった新型コロナウイルスのパンデミックがあり、行動制限がかけられた結果であることは重々承知している。ここですぐにそれを考慮するとは当然申し上げられないが、そういう事情は私どもも承知している。全国募集の際には、県教育委員会も参加して、みなさんと一緒に考えていきたい。

<丸山委員>

○心強いご発言ありがたい。

<宮澤室長>

○先週、教育長の定例の記者会見で、記者から、「入学者の数から逆算して、数校がまずいことになっているが、その場合、再編基準1年目該当校と呼んでいいか」という質問があった。基準は2年連続してということなので、単年度で具体的にどこそこの高校が対象校とはならないし、当該校の生徒、保護者、努力されている先生方、さらに学校を支えてくださっている地域のみなさんがいるわけで、見出しで「〇〇高校再編基準1年目該当」なんて記事は書かない方がいいと述べておいた。それが私ども教育委員会の姿勢であることをご理解いただきたい。

<太田委員>

○以前、再編基準になった時、残していただきたいと村から陳情して、当時の教育長や知事さんが知恵を出してくださって、国際観光科の設置と全国募集を認めてくださった。甘えてはいけませんが、今回も陳情などをした方が良いか。

<宮澤室長>

○知事へ強い要望をしたいという気持ちがあるということを持ち帰らせていただく。

<白戸会長>

○白馬小谷全体で白馬高校を何とかしたいという思いが、強くなってきているのを実感している。ぜひ県のほうと一緒にやっていきたいと思う。

学校の魅力化・将来構想ワーキンググループ

<出口委員>

○中長期にかかわる提言として検討したものを述べさせていただきます。

○まず、目指すべき白馬高校の将来像として、県の第4次教育計画案にかなり寄せている感じになるが、ウェルビーイングを実感できる白馬高校ということで、生徒はもちろん、そこで働く教職員、保護者、そして地域の方々が、白馬高校があることでウェルビーイングが実感できることが理想。岩本悠先生がおっしゃっていたように、この地域から高校がなくなることは、人口の流出やいろいろな文化の損失に繋がっていく。そうならないためには、自分の個性・可能性、多様な他者を尊重し協働しながら持続可能な社会を作っていくことが求められる。そこから白馬高校を北アルプス地域における文化・芸術・スポーツの学びの機会を創出するコミュニティを推進する学校、地域の中核を担っていく学校として育てて行くことを考えた。3つの提言がある。

○1つ目は「グローバル人材の育成」。すでに白馬高校のホームページで使われている「グローバル」という言葉をより一層強化して行くことを考えている。特に外国人移住者の多い白馬小谷の地でこれからの地球規模の視野で地域貢献をする生徒の海外留学を積極的に支援する学校というイメージを持たせたい。現在も白馬ロータリークラブを通じての留学があるが、それにとどまらず、個々の生徒の目的に応じた留学エージェントの斡旋もしていく。入学希望者には中学段階から留学についてのアシストしてくれる学校というのが魅力になるのではないかという意見も出された。留学に関する奨学金制度も充実させたい。英語圏に限らず、海外に白馬高校独自の交流校を設け、生徒を行き来させることも検討課題。

○2つ目は、「多様性を包み込む教育環境の整備」。この会議でN高やS高が生徒数を増やしていることが話題になったが、これからの時代は個々の教育的ニーズに応じた学びを保証する学校が必要になる。一部教科において自由進度学習を実施し、個別的な学びを実現する。そうすることで例えば、なかなか登校できなかった生徒が、白馬高校で学び直しができるようになるのではないか。あるいは、発達にいくつかの特性を持つお子さんに対して白馬高校のような「少人数の学校ならではの指導」ができないか。

また、県内三校目となる公立の通信制課程を今の学科以外に設置し、オンラインで授業を行うことも考えていってはどうか。さらには多様な生徒の社会的自立をめざした通級指導教室の設置の可能性を検討してはどうか。

○3つ目は、「地域教育システムの構築」である。先ほど関係長も学校経営方針で示されたように中高の教育内容を一貫して繋いでいくことで、白馬中小谷中の生徒がより白馬高校へ進学したくなるのではないか。さしあたっては、中学校では総合的な学習の時間での取り組みがかなりあり、それを白馬高校で行っている北アルプス学とつなぐといいのではないか。互いの学習成果を「白馬フォーラム」において発表し合うことも考えられる。そのためには中高連携教員が必要で、村

の教育委員会が白馬高校の運営にさらに深く関与することが大事だ。あるいは教育特区を申請することも検討してほしいという意見も出された。

- 「北アルプスの特性を活かした学校づくりの推進」はこの会で何度も話されているが、地域人材を活用して北アルプス地域ならではの体験学習を実施するというので、先日の岩本悠さんの講演にもあったように、地域の方々と協働する機会を増やしていくことが大事だ。さらに、北アルプス地域の文化・芸術・スポーツのコミュニティの拠点地区づくりの推進に関して、部活動の地域移行化をふまえて、部活動の交流を推進したい。すでに吹奏楽部では、小谷中・白馬中・白馬高校の合同の演奏会が開かれている。
- また、白馬村には人口の10%を超える定住外国人がいるので、それらの方との交流を通して異文化理解を促進する。これは提言1にも繋がるが、白馬ならではの地域の人材を活用することが重要だ。以上のことは、中長期的なビジョンであり、予算を含めてできる・できないの研究とロードマップの作成などの課題が残っている。

<白戸会長>

- 質問・意見があれば伺いたい。

<中島主幹指導主事>

- 通級指導教室については、平成30年度から箕輪進修高校、東御清翔高校、令和2年度から松本筑摩高校で設置され、現在3校で実施している。特別な教育課程を編成することになる。学校には様々な困難を抱える生徒さんがおり、それを学校全体で支援することになるので、これについても研究していくと良いかと思う。

<丸山村長>

- 高校のほうに質問だが、村内に居住する外国人の方とコミュニケーションを図るカフェや村内ツアーを実施していると思うが、松本城でのガイドツアーは怎么样了。

<関校長>

- スノーモンキーや善光寺でのガイドツアーでは丸山村長さんにも協力いただいたが、それを含めて活動は継続している。外国人に対するインタビューや名所紹介・案内についてはどんどん進めたい。

<丸山委員>

- 資料15ページにコンソーシアムが載っているが、メンバーを増やしていく予定はあるか。

<関校長>

- 地域との協働学習が本校の特色であり、協力者を今後も増やしていきたい。

<丸山委員>

- 企業にとっては、学校に協力していることがPRにもなるので、ネット上でもその辺りが見えるようになっていけると協力を得られやすいのではないかと。

<関校長>

- 情報発信をして取り組みを前へ進めたい。それにかかわって、地域と学校との間を結びつけるコーディネーターの存在が重要となる。本校には、ボランティア活動を紹介したり、生徒が地域に出る場合に調整をしてくれたりする方がいるが、さらに地域と学校を結び付けるマネジメントを務めてくれるコーディネーターが配置されればより充実する。今年から県内2校で地域コーディネーターを予算化しているが、ぜひ白馬高校にも配置を検討して欲しい。

<白戸会長>

- 個人的な意見だが、ここ20年ほど地域連携という軸でやってきているが、学校教育の中で子どもたちが地域に出て行く場合に、必ずしも地域のために目に見える成果があるというわけではなく、時に迷惑をかけることもある。松本大学では、地域に迷惑をかけるけれど一緒に若い人たちを育ててもらっているというスタンスでやっている。白馬高校では、自分たちの未来を作るという意味で地域の方々に関わっていただくという意識づけも必要だと思う。
- コーディネーターは大変重要であるが、生徒が地域に出て行った時にだけというのではなく、日常的に地域と繋がりを持って常に情報を交換していることが大切だ。生徒と地域のマッチングということでいえば、誰でもがうまく合うわけがなくて、コーディネーターの役割は極めて重要となる。ぜひ校長先生がおっしゃったことをご検討いただけたらと思う。

<関校長>

○草本委員がSDGs ラボを通じて地域と生徒を結び付ける役割をしてくださったように、そういった方の存在を大事にしていきたい。

<白戸会長>

○全国募集については、秋に向けて具体的な動きをしていかなければならない。1つ目の提案について承認いただけるか。異議なく、承認。

○魅力化については、中長期的な取り組みとなるので、引き続きワーキンググループで検討の上、具体化を図っていただきたい。このような方向で取り組みをすすめてよろしいか。異議なし、承認。

○コロナ禍もあって苦しい局面にあったが、これを何とか跳ね返して、単に白馬高校存続ということにとどまらず、この地域の拠点として地域とともにさらに発展できるように、二つのワーキンググループを軸にして、両村、地域の皆さん、県教委とも協力して、魅力のある学校作りを進めていきたい。

<宮澤室長>

○真摯にして活発なご議論に感謝申し上げます。

○コーディネーターの話があったが、今年度、池田工業高校と野沢北高校をモデル校として、地域の産業界などと幅広の連携を図っていくことになっている。これは他校へも波及させていく事業でもあり、校長先生から白馬でもぜひという話は、ここの皆さんにもご異論ないところと思うので、教育委員会に持ち帰って検討させていただく。

○まとめは会長からあると思うが、白馬高校がこの先もしっかり存続できるように、県の教育委員会も協力して学校を支え、盛り上げて行きたい。白馬高校の存続が大前提であり、そこで充実した持続可能な教育活動が行えることは教育委員会も望んでいるところ。長野県教育委員会としてもそのことに対する責任がある。寮運営のあり方などにも知恵を出ささせていただき、白馬高校生が入学できてよかったと思える環境を整えていきたい。

<出口委員>

○全国募集グループの提案に関して、いつ、誰が、どんなふうにするかを4月、5月に決めないと後手後手になると思う。例えば、スキー部のレベル別による指導体制の確立というのはできるのかできないのか。スキー部やダンス部を全面に出した募集活動はどうやってやるのか、ここで決めなくていいのか。

<白戸会長>

○やるということは先ほど承認いただいた。どういうふうにするかは学校の方とも相談しながらということになる。出口委員がおっしゃる通り、委員会全体として取り組む課題だと認識している。できるだけ、皆さんを巻き込んでやっていきたい。

(6) 意見交換

<柳田コーディネーター>

○全国募集における出願手続きについて聞きたい。全国募集を実施している学校の多くは、入学条件として身元保証人がいることを掲げているが、長野県の場合は「白馬高校への入学を強く希望する者」というのが条件となっている。島根県の隠岐島前高校での取り扱いについて、岩本悠さんに以前うかがったことがあるが、島根県の一般入試では、身元引受人がいることが条件となっていて、一方、推薦入試においては、身元引受人のいない県外生徒について、出願前手続きとして、動機・適性興味関心・入学の意思・人物・基礎学力・基本的生活力といった項目について、中学校長の推薦書を提出させているとのこと。こうした制度について県教委としてどのように考えるか。

<宮澤室長>

○私は受検の直接の担当ではないが、県には県外生の志願承認手続きの取り決めがあり、白馬高校の国際観光科についても、出願する中学校長や保護者からの書類を提出してもらった上で志願承認手続きを行っている。白馬高校においては、生徒の身元引受に関する契約書のようなものはないが、親代わりとして、村が寮運営にあたっていただいているということ为前提とした志願承認手続きになっていると承知している。

○以前、大勢の生徒が集まって寮が不足した際に、事務組合様と学校と県が話し合っ、出願にあたっては、事前に寮と学校双方から、保護者と受検希望者と面談をして、学校の特色とともに、

寮における集団生活上の規則や学校でのきまりについても説明するという形を決めた経緯がある。コロナで移動が困難になって、オンラインによる説明になったところもあると思うが、志を持った生徒さんをひとりでも多く入れるように工夫をしていきたいと思う。県教委としても県外の説明会に参加して説明をさせていただこうと考えている。

<白戸会長>

○今のことは大事な点で、だからこそ中長期計画を考え、学校としてだけでなく、地域としてこういう生徒と一緒に学んで欲しい、こういう高校にしたいということを考えていかなければいけないと思っている。

<草本委員>

○新規事業の予算の中で寮費関係が圧倒的に大きい金額を占めているが、施設が古いので修繕費とか、また教育寮としてチューターの人件費とかがかかるというのであれば分かるが、そうでもないようなので、いったい何にそれほどのお金が使われているのか教えてほしい。

○もう一つ、ここで素晴らしい議論がされているが、私たち大人が考えてやっているだけでなく、高校生という当事者がここにいて、学校をどうしたいとかの意見を話すとか、ワークショップと一緒にやるとか、直接高校生の声が聞けると私たちももっともっと方向性が変わることもあるのではないかと。何らかの形でワーキンググループに高校生の意見を吸い上げることはできないか。

<関校長>

○学校の中でも生徒の考えをまず聞こうと常々言っているところ。機会があるなら話をしたいという生徒も増えているので、学校からもそういった場を設けることをお願いしたい。

<白戸会長>

○そもそもワーキンググループを設置したのは、いろんな提案をして学校にやらしてもらおうというだけではなくて、自分たちでもできることは一緒にやりたいということから始まった話だ。今のご意見は大変大事だと思うし、高校生もそうだけれど中学生がどういうふうに思っているのかということも把握する必要があると思う。

<松澤局長>

○予算の関係だが、寮の費用としては人件費と給食費、この二つが大きい。今は国の補助金があり抑えられているが、24時間生徒を管理するのに36協定の縛りもありなかなか難しい。下宿も含めて上手くやれないかと考えている。いろいろな立場の人を集めたワークショップでぜひ議論していきたい。

<草本委員>

○岩本さんの講演会には、ここには参加されていない方からたくさん意見が出て良かった。生徒を巻き込むこともそうだが、地域の方を巻き込んでいくことも大事だろうと思う。

<出口委員>

○草本さんに賛成。今日はこれで終わるが、第2回では生徒も入れた話をしっかりやりたい。

<柴田委員>

○先ほどの地域に意見を求めるとか地域に出かけるとかという話に関して、小谷のある地区では前回選挙での有権者数が200人から今回185人と減っている。もし可能なら、高校生と一緒に地域の再生について考える場など持てないか。

<白戸会長>

○それは以前のコンソーシアムの議論の時から出ていた問題で、そういうこともやって行けるようにしたい。

<関校長>

○普通科も国際観光科も地域に出て活動ができるようにカリキュラムを改編した中で、3年生に「観光まちづくり」という科目を入れた。観光単独で考えるのではなく、まちづくりや地域の人づくりという観点から学ぼうというもので、高校生が地域との交流を通して、どうすれば地域が残れるのか、活性化できるのかを考えることになっている。今のような地域のあり方を考える機会をぜひいただけたらと思う。

<白戸会長>

○島根県の島前高校などの取り組みは、教育をどうするのかだけではなくて、県全体で中山間地の問題をどうするかという大きな取り組みの中の1つになっている。

○まだまだご意見があるかと思うが、ここで区切りとしたい。学校とも相談して、今日の議論を続ける機会を作りたい。

<藤森教頭>

○今後の予定として、第2回を9月頃、第3回を11月6日(月)、4回を2月13日(火)に予定しているが、今の議論を踏まえて、次はいつがよろしいか。

<太田委員>

○協議会として7月頃にやればいい。協議会は年に何回とか決まっているか。

<白戸議長>

○予算があると思うが、回数の規定はない。

<出口委員>

○中学3年生が初めて三者懇談会をやって進路を決めて行くのが夏休みに入る前なので、協議会は9月では遅い。

<白戸委員>

○では、次回協議会は前半に詰めてやることにしたい。

<藤森教頭>

○それでは、次回を1学期中にやるということで日程を調整する。

(7) 閉会